

厚生科学研究費補助金（子ども家庭総合研究事業）
小児の事故とその防止に関する研究（主任研究者： 田中哲郎）
分担研究報告書

事故防止啓発方法に関する研究

分担研究者 衛藤 隆 東京大学大学院教育学研究科教授

研究要旨： 自動車走行中に衝突事故が起こった場合、同乗の乳幼児に対する危険は大人よりはるかに高い。このリスクを減らすため、わが国においても 2000 年 4 月からチャイルドシート使用が法律に基づき義務化されることになっている。法制化前の時点でその使用実態や親の意識について調査した。また、乳幼児の誤飲、誤食事故の第 1 原因であるたばこについて、子どもの周囲の喫煙環境について現状を調査し、今後の保健所の安全育児の指導に反映させることを意図した。

乳幼児の事故を防止するためには家庭で子育てをする親に対して、事故についての具体的で効果的な教育・指導が必要である。小児事故予防教室を企画し、親の事故についての理解度を講義前後で調査し、教育的介入の評価に役立たせることを試みた。家庭ですぐに実行出来る事を周知する事が効果的であるとの結論を得た。

分担研究者

衛藤 隆 東京大学大学院
教育学研究科 教授

研究協力者

斉藤麗子 東京都文京区本郷保健所 参事
保健予防課長事務取扱

保健所における事故防止指導に関する研究 I
： 両親学級 乳幼児健診来所者におけるチャイルドシート使用状況と親の喫煙状況

A. 研究目的

乳幼児の安全育児をすすめるための方法を考察するため、2000 年 4 月から法制化されるチャイルドシートの着用について調査した。また乳幼児の誤食事故の第 1 原因であるたばこについて、家庭内での喫煙環境についても

調査した。

B. 研究方法

保健所の両親学級、母親学級来所者と乳幼児健診（4ヶ月）1歳6ヵ月児健診、3歳児健診来所の対象児の親に対し、無記名の質問紙調査を行った。対象の母親の年齢は 22 歳～40 歳、父親の年齢は 23 歳～44 歳であり、質問紙調査の対象は計 424 組であった。

C. 研究結果

1. マイカーをお持ちですか

- | | |
|----------------|-------|
| ① 持っている | 52.9% |
| ② 生まれたらいずれ購入する | 13.7% |
| ③ 持つ予定はない | 33.3% |

2. チャイルドシートは（設問 1 で①、②の

人にお答え願います)

- | | |
|----------------|-------|
| ① 持っている | 46.3% |
| ② 生まれる前に購入する | 23.9% |
| ③ 生まれてから購入する | 21.6% |
| ④ 抱いて乗るので使用しない | 8.2% |

3. チャイルドシートをいつから使うか

- | | |
|------------------|-------|
| ① 産院を退院する時から | 29.5% |
| ② 首が座るようになってから | 36.4% |
| ③ お座りが出来るようになったら | 27.3% |
| ④ 歩くようになったら | 6.8% |

4. 喫煙状況

- | | | |
|---|-------|-------|
| 夫 | ①吸う | 52.8% |
| | ②禁煙した | 5.6% |
| | ③吸わない | 41.6% |
| 妻 | ①吸う | 2.3% |
| | ②禁煙した | 8.7% |
| | ③吸わない | 89.0% |

5. 灰皿はどこにありますか (全員お答え下さい)

- | | |
|--------------------|-------|
| ① 各室にある | 0% |
| ② 子どものいない部屋にある | 19.3% |
| ③ 子どもの手の届かないところにある | 44.6% |
| ④ 灰皿はない | 36.1% |

6. 吸っている人は

- | | |
|--------------------|-------|
| ① 今まで通り吸い続ける | 26.0% |
| ② 本数を減らす | 14.0% |
| ③ 子どもの周囲で吸わないようにする | 28.0% |

- | | |
|-----------|------|
| ④ 禁煙するつもり | 4.0% |
|-----------|------|

7. 赤ちゃんの周囲での喫煙は (全員お答え下さい)

- | | |
|--------------------------|-------|
| ① 特に何も考えていない | 6.0% |
| ② 吸う人は換気扇の下やベランダで吸う | 53.3% |
| ③ 吸う部屋を決めてそれ以外を禁煙にする | 12.7% |
| ④ 家の中すべてを禁煙にしてお客にも守ってもらう | 28.0% |

D. 考察

マイカーを持っている保護者は対象者の約半数近くであった。これから購入する場合も加えると2/3が子育て中にマイカーを利用している。

チャイルドシートの購入は母親学級、両親学級参加者は「生まれてから購入する」が多く、乳幼児健診では「すでに使っている」が「これから購入する」より多かった。わずかではあるが抱いて乗るので使用しない人もいるが、法制化されれば使用するようになるのであろうか。

使用時期については「首が座るようになってから」、「産院を退院した時から」「座るようになってから」の順に多かったが、中には「歩くようになってから」という人もいた。使用時期について産院を退院する時からとの指導を母親学級で徹底しなければならない。さらに健診の場でも繰り返し徹底をはからねばならないことがこれらの回答結果から示唆された。

喫煙は夫の半数弱が喫煙し、妻はほとんど非喫煙であった。これは20歳代、30歳代の男性の喫煙率と一致する。

灰皿は子どもの届かない所においているとの回答が多かったが、常にそうあってほしいが、喫煙者は「子どもの周囲で吸わないようにする」「本数を減らす」と回答が多く、禁煙するとの回答は少なかった。

喫煙する人はほとんどが換気扇の下で吸うと答え、非喫煙者は家の中すべて禁煙すると答えていた。家庭用の換気扇でどの程度副流煙の害を与えない効果があるのか、はなはだ疑問である。

たばこの誤飲を予防するには、家の中を禁煙にすることが望ましいが、喫煙者の1/4が今まで通り吸い続けると答えており、依存性のため禁煙しにくい状況がうかがえる。

E. 結論

都会でも子育て中の家庭の約2/3がマイカーを使用している状況で、全国的にはそれ以上に使用状況が高い可能性がある。そのため車の中での安全対策としてのチャイルドシートの使用については、保健所の育児指導には欠かせない。その使用時期についてはより早期からの使用を指導するため、母親学級や両親学級で必ず指導する必要がある。

子育て中の父親の半数以上がいまだに喫煙している環境であった。妊婦や乳幼児への副流煙の影響を考えると母親学級や両親学級で父親への禁煙指導も必要となっている。また、乳幼児の誤飲誤食事故の原因の第1位はたばこであるので、灰皿の場所や家の中の喫煙

場所にも注意を払う必要性を指導していかねばならない。この禁煙指導については、喫煙者本人である父親は保健所に来所する機会があまり無いので、父親達を禁煙に向かわせるために、母親を指導すると共に、父親達へ配布するものを考えて、波及効果のある方法を考えていかねばならない。

F. 研究発表

1. 論文発表

衛藤 隆：心肺蘇生法の国民一般への普及の必要性。小児内科, 31(増刊): 27-29, 1999

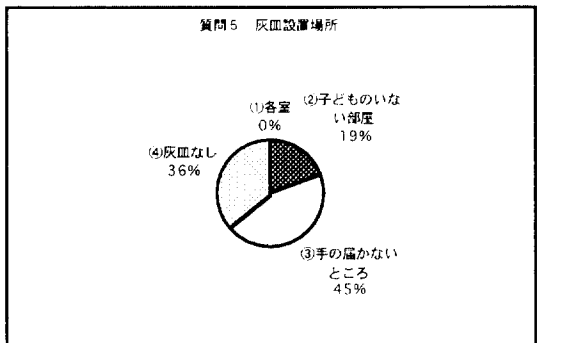
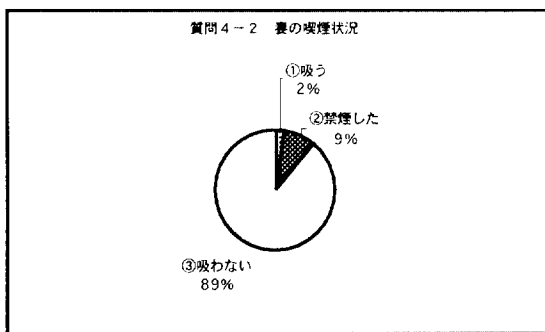
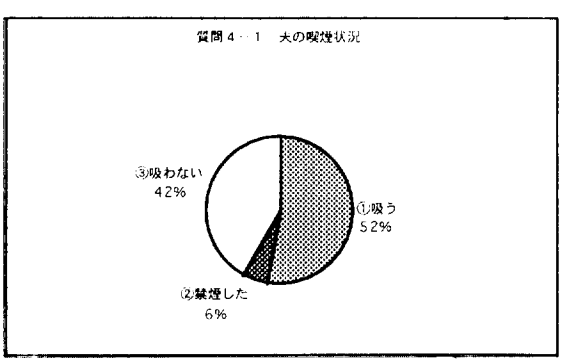
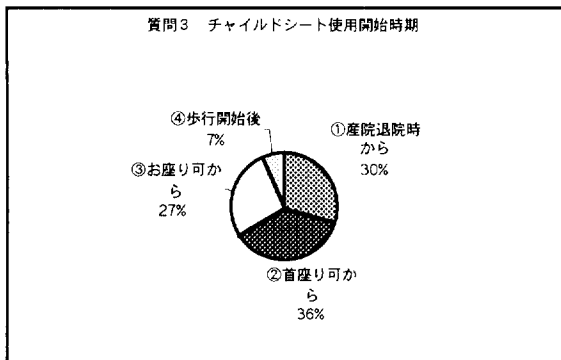
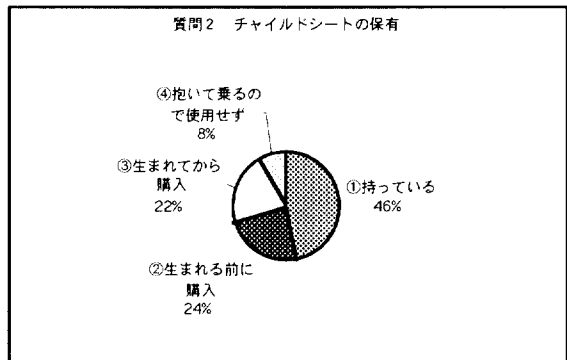
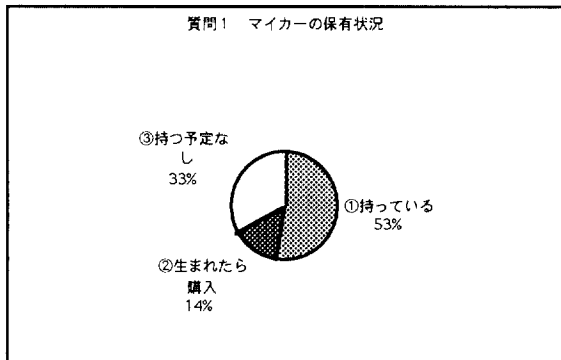


図 両親学級・乳幼児健診来所者（親）に対するチャイルドシートおよび喫煙に関する調査結果

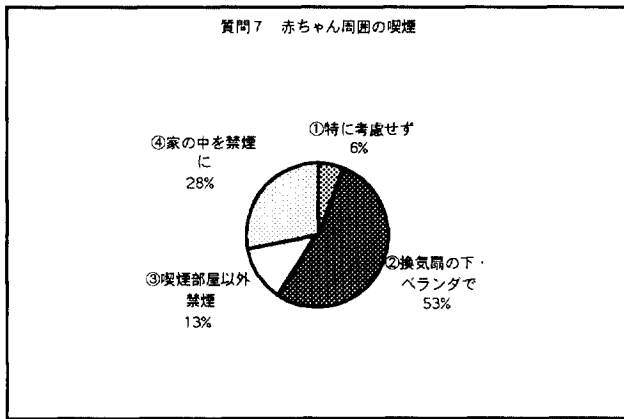
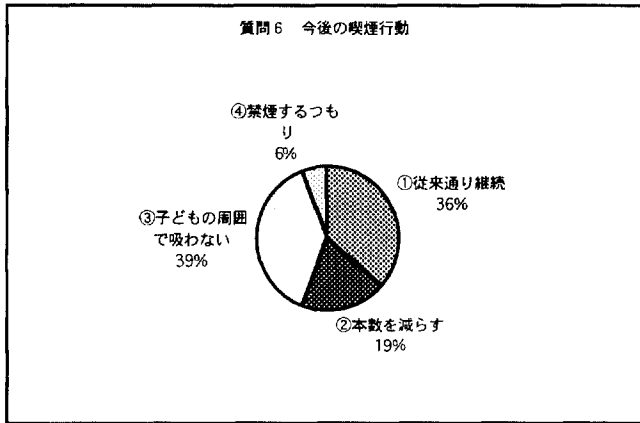


図 両親学級・乳幼児健診来所者（親）に対するチャイルドシートおよび喫煙に関する調査結果（続）

↓ **検索用テキスト** OCR(光学的文字認識)ソフト使用 ↓
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

研究要旨：自動車走行中に衝突時事故が起こった場合、同乗の乳幼児に対する危険は大人よりはるかに高い。このリスクを減らすため、わが国においても2000年4月からチャイルドシート使用が法律に基づき義務化されることになっている。法制化前の時点でその使用実態や親の意識について調査した。また、乳幼児の誤飲、誤食事故の第一原因であるたばこについて、子どもの周囲の喫煙環境について現状を調査し、今後の保健所の安全育児の指導に反映させることを意図した。

乳幼児の事故を防止するためには家庭で子育てする親に対して、事故についての具体的な効果的な教育・指導が必要である。小児事故予防教室を企画し、親の事故についての理解度を講義前後で調査し、教育的介入の評価に役立たせることを試みた。家庭ですぐに実行出来る事を周知することが効果的であるとの結論を得た。